

従属句の類型を再考する

大堀壽夫（東京大学・言語情報科学専攻）

1. 導入

1.1 概要

複文の類型は、文法の他の側面に比べるとまだ考えるべき部分が多い。本発表では、南(1964、1974、1993 他)の「階層的モデル」を複文の類型化の試みとして再解釈し、他の諸言語からの事例も参照しつつ、その現代的意義を検討する。

1.2. 問題設定

- ・ポイント1：複文を論じる枠組み（用語、分類、基準）の検討と体系化。
- ・ポイント2：階層的モデルはいかなる要因によって動機づけられているか。
- ・ポイント3：南による A-C 段階の従属句分類に修正が必要だとすればそれはどのようなものか。
- ・ポイント4：日本語の複文構造のどの部分が言語一般の特徴の反映で、どの部分が個別的なものか。

2. 複文の類型

2.1 予備的注記

- ・「複文」という言い方は、「文」を前提としているため、必ずしも望ましいものではない。「複合的構造」や「接続構造」のような言い方がカバータームとしては中立的と思われる。
- ・意味に関わる部分（狭義の意味論・狭義の語用論両方）と、形式に関わる部分を分けつつ、両方に注目する。

2.2 文の層状構造と接続

・言語分析で「階層」というとき、依拠する理論によって意味が大きく違う。RRG (Role and Reference Grammar) では、文の句構造を内核 (nucleus)、中核 (core)、節 (clause) という三つの層 (layer) からなるものと考え (Foley and Van Valin 1984; Van Valin and LaPolla 1997; Van Valin 2005)。接続構造は1つの文と、その部分をなす複数の節（あるいは中核、内核）から構成される（日本語についての RRG の観点からの分析は Hasegawa 1996; 大堀 2000 を参照）。→第一のパラメータ

(1) 図書館で本を借りた。

(2) 節 [周辺の語句: 図書館で 中核 [項: 本を 内核 [述語: 借りた]]]

・3つの層から見た接続タイプを「接続」(juncture)という。内核と中核の接続では項が必ず共有される、あるいはイベント項の関係となる。

- (3) 内核接続: [節 [周遍的語句: After lunch 中核 [項: I will 内核 [述語: go] 内核 [述語: see]] 項: a movie]]] .
- (4) 中核接続: [節 [周遍的語句: After lunch 内核 [項: I 内核 [述語: tried]] not to 中核 [内核 [述語: eat] 項: too much snack]]]] .
- (5) 節接続: [節 [周遍的語句: After lunch 中核 [項: she 内核 [述語: had] 項: a meeting]] but 節 [周遍的語句: before that 中核 [項: they might have already 内核 [述語: reached] 項: an agreement]]] .

2.3 依存関係の種類

・多くの分類では、等位(重文)と従位(複文)という用語を立ててきた。等位接続(coordination)は英語ならばandやorで表す。(3)-(5)はどれも等位接続。日本語から節レベルの等位接続の例として(6)、従位接続(subordination)の例として(7)補文構造を挙げる(これらは略式表記であり、形態素の分析はしていない)。→第二のパラメータ

- (6) [節 [周遍的語句: 今日で 中核 [項: 試験が 内核 [述語: 終わったし]]], 節 [周遍的語句: レンタルショップで 中核 [項: 映画でも 内核 [述語: 借りよう]]]] .
- (7) [節 周遍的語句: やはり [中核 [項: 節 [周遍的語句: 昨日で 中核 [項: 試験が 内核 [述語: 終わった]]] ことが 項: 学生たちには 内核 [述語: 嬉しいようだ]]]] .
- (8) [節 [節 [周遍的語句: 明日で 中核 [項: 試験が 内核 [述語: 終われば]]], 節 [周遍的語句: キャンパスから 中核 [項: 学生が 内核 [述語: 減るだろう]]]]] .

・(8)の「明日で試験が終われば」という節は時制が形態的に現れず、主節を参照することで二次的に時間の解釈が決められるという点で、文法標示の依存がある。これを指すために、連位接続(cosubordination)という用語を導入する。3つの依存関係から見た接続を、「接合」(nexus)と呼ぶ。連位接続では、接続の起きる層の操作子の標示が抑止される。

- (9) スエナ語 (パプアニューギニア、Wilson 1969: 103)

nakare suzau-mite-kare na duw-e-n-na
私たち 行く-反復 [アスペクト] -複数 私 倒れる-当日 [テンス] -一単-直説法 [ムード]
「私たちが進んでいたところで私は倒れた」(接続形態はゼロ)

・これは1つ目の節でテンスとムードの操作子の抑止（＝標示されない）が起きているので、操作子の依存関係をもった連位接続の例とみなされる。

・接続と接合、それぞれ3通りのタイプを掛け合わせると、合計9通りの接続構造の類型が得られる。例えば(9)は「節・連位接続」と分類される（類型の最近の再検討の試みとしては Brill 2010 収録の Foley および Bickel 論文を参照）。

3. 階層の動機づけ

・動機づけを求める立場：南による従属句の A-C 類を外在的な何物かと対応する、あるいは派生関係にあると考える（プリミティブ、あるいは生得的であるとは考えない）。

3.1 概念レベル

・文の「概念レベル」（例えば益岡 1997）は文字通り概念的な解釈ストラテジーと見るべきであり、文構造と逐一对応する必然性はない。描叙、判断、提出、表出の全段階は名詞文や一語文でも、それが発話状況に投入されたならば、文末のモダリティ的要素の有無とは関係なしに「表出」までの全段階が顕現しているとするべきではないか。あるいは、「外側」の段階が「内側」の段階を常に構造上前提としているとは限らないのではないか。

(10) Medium coffee, with cream and sugar. [名詞文：依頼]

(11) 雪！ [名詞文：発見・感嘆]

(12) ごめんごめん。 [定型句（名詞由来）：謝罪表明]

・接続においても、例えばA類内核接続の連用形反復の従属句「撫で」はいかなる概念レベルも表象しないと思われる。

(13) 頭を撫で撫で話しかける。

・南モデルは、概念レベルに基づいた文成立論と同一ではないと考える。「さきに従属区を三つの類に分けたのは、主としてそれぞれに現れる要素の違いによって分けたものであった。それは一応それだけのことであるが、それから文を作る場合の段階を考えるとというのは一つの解釈である」（南 1974: 134-135、下線部は大堀）。尾上（1990, 1996, 1999）も参照。この下線部について再考し、組み立て直す。

・「構成する（constitute）」関係と、「対応する（correspond）」関係とは本質的に異なる。

3.2 接続と接合

・層状構造は、(概念レベルではなく) 内心構造から見た文の成立段階である。形式・意味両面の構造が対応する。

(14) 述語→命題 (中核部分) →出来事 (状況設定を含む)

・ここにはいわゆるモダリティ的要素は関わってこないことに注意。接合については、概念的な依存の仕方 (メンタル・スペース配置) と結びつく (Uno 2009)。

3.3 層状構造と操作子

・RRG では句構造とは別に操作子 (operator) の表示を設けている。次の例では、相+根源的モダリティ+否定+時制+証拠性+言語内行為が表されている。

(15) 昼食後は起きていられなかったそうだ。

・操作子は(16)に示すように (一部簡略化)、三つの層と対応する下位分類をもつ。これらの各要素は形態論的に逐一実現する必然性はなく、一对多の対応は特異なことではない。(16)が規定するのは、操作子が接尾辞として連なって現れる時には層ごとの順序が決まっているという通言語的な一般化である。ある層の中での操作子の線的順序は、言語ごとに決まる部分が多い。ただし、言語内行為は常に最も「外側」にあるという点で特別。

(16) 内核：相、方向 (移動自体の経路)

中核：方向 (事象の参加者間の関係に言及)、根源的モダリティ、否定

節：地位 (認識的モダリティ、スコープの広い否定)、時制、証拠性、言語内行為

(17) ドイツ語

Man sollte natürlich alle Kurosawa Filme gesehen haben.

人 助動詞 当然 全て (人名) 映画 見る (過去分詞) 助動詞

「当然、全ての黒沢映画を見ていただろう」

・言語内行為は最も「外側」であり、むしろこれだけは文を規定する操作子と見る方が適切かもしれない。形態的には複数の節からなる1つの文であっても、意味の面からは複数の文と認定すべきケースが出てくる (柴谷 2011)。

(18) 申し訳ないが、静かにしてくれ。

・これは意味的には節を越えた「文連接（2つの言語行為）」、形態的・正書法的には「節連接」となる。形と意味のミスマッチはさまざまな構文で見られるが、これはその一例。

4. 南モデルの再検討

4.1 A類

・A類を見ると、従属句の自律性はきわめて低い。特に、連用形反復と形容詞連用形はこの性格が強い。例えば連用形反復には受給形が使われない。これは語彙レベルの操作であるため、統語レベルの操作を含む受給形の適用を先に行うのは不適格となると思われる。

(19) *頭を撫でてやり撫でてやり話しかける。

・繰り返しの後に受給形をつける場合は、「*撫で撫でてやり」は不適格だが「撫で撫でてやり」は容認可能である。これらは中核よりも接続類型としては内核接続の一種に数えるべきかと思われる。

・A類の他の形式である「ーナガラ（継続）」、「ーツツ」、「エテ1（様態）」については、項（基本的に主語）と周辺の語句（例えば時間・場所的な設定）の共有が見られることから、中核接続であることが分かる。加えて、中核レベルの操作子である根源的モダリティや否定の生起が抑止されていることを考えると、中核連位接続と見るのが妥当である。

4.2 B類

・まず、「エテ」による接続の中でも項（基本的には主語）を義務的に共有するものは中核接続にあたる。これはA類の中核連位接続と異なり、従属句にも中核レベルの操作子（(20)では能力と否定）が生起可能であることから、中核等位接続と見なされる。

(20) 煙草をやめられなくて困っている。

・これ以外のB類は項の共有が義務的ではないため、節接続である。それらは依存関係によって二種類に分けられる。まず節レベルの操作子（時制）であるル形／タ形の標示の区別を従属句が持つかどうかで、連位接続とそれ以外に分けられる。「エレバ」と共に、「エテ2（理由）」、「エテ3（継起）」、「エト」、「ーナガラ（逆接）」、「エタラ」、「エテモ」、「連用形2」は連位接続を具現する。否定形である「エナイデ」は「エテ」の変種なので独立したタイプとする必要はない。「エズ（ニ）」も操作子の生起と項の共有の非義務性から、やはり節連位

接続に分類される。

・ B類のうち連位接続でないものは「一ノデ、一ノニ、一ナラ」である。これらの形式ではル形／タ形の標示は抑止されない。意味的には副詞節にあたるため、一応は節従位接続と分類される。ただし、項の位置に埋め込まれているわけではなく、構造上は周位的要素(=付加部)の位置になる。

4.3 C類

・「一ケ(レ)ド、一カラ」については、副詞節としてはたらくことを考慮して節従位接続と分類できるように思われる。B類の「一ノデ」とC類の「一カラ」を比べると、同じ節従位接続でもいくつかの違いが見られる。例えば「こそ」による焦点化は「一ノデ」では不可で、「一カラ」では可能であることが知られている。

(21) 人生には終わりがある {*ので／から} こそ、今を精一杯生きるべきだ。

・ こうした違いは、B類の接続形式はC類の接続形式よりも主節との統合性が強いということの反映として理解される。すなわち、B類とC類の副詞節は主節との関係が異なる。B類副詞節は節の「内側」に接続し、C類副詞節は「外側」に接続する。RRGでは単文・複文を問わず、有標の焦点は節の中核部分ではなくその外側に置かれるという分析をとる。すなわち節のより「外側」に接続する従属節のほうが有標の焦点の位置との適合性が高い。

・ C類の中でも、「一ガ、一シ」は二つの出来事を等資格で並列的に表現するという点で、節レベルの等位接続と分類される。これらの場合、接続された単位はどちらも節レベルの操作子を特に制約なしにとれる。なお、C類に入っている「一テ4、一連用形3」も同じタイプとして分類できるように思えるが、操作子の生起に制限があるため、一種のミスマッチと見なさざるをえない。

・ 「一カラ」節については、田窪(1987)がきわめて重要な分析を提示している(この他、理由節の分析としてはUno 2009、前田 2009を参照)。節レベルの従位接続と思われるC類の形式には、より結合が弱く、節の独立性の強い例が見られる。一例として、「依頼・命令」の言語行為を含む文をあげる(例文(18)も同様)。

(22) いい子だから静かにしなさい。

・ これらの文では、従属句は実質的な因果関係を表しているのではなく、言語行為が成立するための条件を提示している。そして従属句自体、(22)では「事実の明示的承認」という言語行為となっている。RRGの層状構造の理論では、言語内行為が最も外側の操作子

であり、これは文として独立した単位にのみつく。この点で、(22)は依存関係のきわめて弱い事例であり、C類の等位接続として「ーカラ2、ーケ(レ)ド2」を別に立てる必要がある(この他、南モデルの再検討についての注目すべき研究として丸山 2001; 戸次 2007を参照)。

5. 階層性の普遍的側面と個別的側面

- ・層状構造は本質的に構造上の単位である。RRGの枠組みではモダリティを含む操作子は別の次元に属する表示系をなす。操作子は層状構造に投射(project)されるが、句構造の「構成要素」を同次元で成してはいない。したがって「文=命題+モダリティ」といった句構造の展開はRRGでは明白に棄却される。
- ・近年の生成文法では、「機能範疇」を増殖させることで本来の句構造と操作子を同次元に展開する試みがあるが、RRGはそうした範疇に対応する操作子を、句構造規則とは別次元で表示して投射する並列型設計(parallel architecture)をとる。
- ・日本語の従属句における操作子の生起条件を文の句構造に直結させるやり方は、日本語が膠着語であり、動詞に接尾辞を線的に連ねるといった個別的・偶発的事情に支えられたものであり、そこに動機づけをもった一般的性質を認めるのは困難である。層状構造の各レベルと操作子の間の対応関係には、普遍的な性質があると思われるが、それは操作子の線的順序、および構造の左右どちらに展開するかとは別問題である。
- ・本論で示した類型は汎用的なスキーマであるが、今後は理論的な枠組みを拡充しつつ、個々の接続形式について意味論・語用論的な面の考察を深めた精度の高い構文分析を行うことが期待される。

【本発表の内容は大堀(2012)に部分的に基づいている。出発点となった文法学会第一回集中講義『南モデルの意味を考える』(1999年7月24日・東京大学、7月31日、園田学園女子大学)において、多くの示唆を下さった南不二男氏、尾上圭介氏、および講義参加者の方々に感謝したい。】

参考文献

- Bril, Isabelle (ed.) (2010) *Clause Linking and Clause Hierarchy: Syntax and Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.
- 戸次大介(2007)「南の従属節分類再考」日本言語学会134回大会発表.
- Foley, W. A. and R. D. Van Valin, Jr. (1984) *Functional Syntax and Universal Grammar*. Cambridge: Cambridge UP.
- Hasegawa, Yoko (1996) *A Study of Japanese Clause Linkage: The Connective TE in*

Japanese. Tokyo: Kurosio & Stanford: CSLI.

- 前田直子 (2009) 『日本語の複文—条件文と原因・理由文の記述的研究』 くろしお出版.
- 丸山岳彦 (2001) 「従属節の機能レベル—文の階層構造と従属節の分布」『さわらび』 10.
- 益岡隆志 (1997) 『複文』 くろしお出版.
- 南不二男 (1964) 「複文」『講座現代語 6・口語文法の問題点』 明治書院.
—— (1974) 『現代日本語の構造』 大修館.
—— (1993) 『現代日本語文法の輪郭』 大修館.
- 大堀壽夫 (2001) 「言語的知識としての構文—複文の類型論に向けて」坂原茂 (編) 『認知言語学の発展』 ひつじ書房.
—— (2012) 「文の階層性と接続構造の理論」『国語と国文学』 11月号.
- 尾上圭介 (1990) 「文法論—陳述論の誕生と終焉」『国語と国文学』 5月号.
—— (1996) 「文をどう見たか—述語論の学史的展開」『日本語学』 8月号.
—— (1999) 「南モデルの内部構造と学史的意義」『言語』 11月号.
—— (2001) 『文法と意味 I』 くろしお出版.
- 柴谷方良 (2011) “Toward a functional definitions of clauses and sentences”. 東京大学言語情報科学専攻での講演.
- 田窪行則 (1987) 「統語構造と文脈情報」『日本語学』 5月号.
—— (2010) 『日本語の構造—推論と知識管理』 くろしお出版.
- Uno, R. (2009) *Detecgint and Sharing Perspectives Using Causals in Japanese*. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Van Valin, R. D., Jr. (2005) *Exploring the Syntax-Semantics Interface*. Cambridge: Cambridge UP.
—— and LaPolla, R. J. (1997) *Syntax: Structure, Meaning, and Function*. Cambridge: Cambridge UP.
- Wilson, D. (1969) “Suena grammar highlights”. *Pacific Linguistics Series A*. No. 18.